
学習院の弓道

- 一、学習院と弓道部の歴史
- 二、本多流概説
- 三、学習院・弓道部と本多流

一、学習院と弓道部の歴史

西暦	和暦	学習院/弓道部の動き	日本・世界の出来事
1847	弘化 4	京都御所日ノ御門前に学習院開講	
1849	嘉永 2	「学習院」の勅額下賜される	
1853	6		米艦が長崎、英艦が浦賀に来航 ペリー来航
1868	明治 1	京都学習院を「大学寮代」と改称される	戊辰戦争
1876	9	華族学校学則制定	
1877	10	開業式挙行、天皇皇后親臨、勅諭・令旨を賜わる。改めて「学習院」の勅額を下賜される	西南戦争
1884	17	宮内省所轄の官立学校となる	
1885	18	華族女学校を創設する(四谷区尾張町)	
1888	21	学習院は麹町区三年町(虎ノ門)の旧工部大学校跡に移転	
1889	22	華族女学校は麹町区永田町に移転 「輔仁会」発足	大日本帝国憲法発布
1890	23	学習院は四谷区尾張町に移転	第一回衆議院議員総選挙
1893	26	別科を大学科と改称	
1894	27	華族女学校に幼稚園を設ける	日清戦争(～1895) 日露戦争(～1905)
1904	37		
1905	38	大学科を廃止 本多利実翁、学習院輔仁会の弓術師範となる(＝学習院弓道の原点)	
1906	39	華族女学校と学習院を併合し、華族女学校を学習院女学部と改称	
1908	41	東京府下高田村(目白)に移転する(初等学科と女学部は旧位置)	
1910	43		日韓併合
1914	大正 3	女学部は青山に移転。女学部は女子学習院となる。	第一次世界大戦(～1918)
1918	7	中等科1、2年の授業で弓道を正科とする 学習院の初等学科・中等学科・高等学科を初等科・中等科・高等科に改める。	米騒動、シベリア出兵
1919	8	弓道場建設・弓道部発足。師範:本多流・大内儀一氏	パリ講和会議・ベルサイユ条約締結
1923	12		関東大震災
1928	昭和 3	学習院開校創立五十年祝典を挙行	張作霖爆殺事件 満州国建国、五・一五事件
1932	7		
1935	10	女子学習院開校五十年記念式を挙行	
1937	12		日中戦争(～1945)
1941	16		太平洋戦争(～1945)
1945	20	戦災で目白本院の大半を焼失。 弓道場全焼。弓道部は事実上の解散。 GHQによる 武道禁止令発布	終戦
1946	21	女子学習院は牛込区戸山町に移り、授業を始める	日本国憲法公布
1947	22	学習院・女子学習院に関する官制廃止される 財団法人学習院による新しい経営開始。私立学校となる	日本国憲法施行、教育基本法制定
1948	23	新制の中等科・女子中等科を開設し、初等科は男女共学を実施	
1949	24	新制の高等科・女子高等科を開設	
1950	25	新制の大学を開設(文政学部:文科学科・哲学科・政治学科、理学部:物理学科・化学科) 短期大学部を設置(文科学科)	朝鮮戦争(～1953)
1951	26	学校法人・学習院となる。短期大学部に家庭生活科を増設	日米安全保障条約締結
1952	27	大学文政学部を廃し、政経学部と文学部を設ける -政経学部:政治学科・経済学科、文学部:哲学科・文科学科	血のメーデー事件
1953	28	短期大学部を女子短期大学と改称	
1957	32	弓道部、再建に向けて活動開始	
1960	35	弓道場完成(野立て)	所得倍増計画。ベトナム戦争(～1975)
1961	36	大学文学部に史学科を増設	
1962	37	東京都学生弓道連盟加入(IV部)	
1963	38	学習院創立八十五周年記念式典を挙行。幼稚園を設置。大学理学部に数学科を増設	
1964	39	大学法学部(法学科・政治学科)、経済学部(経済学科)を設置(＝政経学部を分離)	東京オリンピック開催
1970	45	弓道場(旧道場)完成	大阪万博
1972	47	女子が独立して東京都学生弓道連盟加入(IV部)	沖縄返還、札幌オリンピック開催 第一次石油危機、変動相場制移行
1973	48		
1974	49	大学経済学部経営学科を増設	
1975	50	大学文学部に心理学科を増設	第一回サミット開催
1977	52	明治10年より数えて創立100周年	
1978	53	学習院創立百周年記念式典を挙行	
1989	63		日中平和友好条約調印 消費税スタート
1991	平成 3		湾岸戦争、バブル崩壊
1995	7		阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件
1998	10	短期大学を改組、女子大学開設(国際文化交流学部:日本文化学科・国際コミュニケーション学科)	長野オリンピック開催
1999	11	大学開学50周年記念式典を挙行	ヨーロッパ単一通貨ユーロ登場
2000	12	新弓道場完成(富士見会館・旧道場跡)、創部80周年記念式典開催(大正8年から)	
2001	13		アメリカ同時多発テロ事件
2002	14	学習院創立百二十五周年記念式典を挙行(明治10年から数えて創立125周年)	サッカーW杯・日韓共同開催
2005	17	女子大が独立して東京都学生弓道連盟加入(V部)	愛知万博
2006	18	女子大学国際文化交流学部英語コミュニケーション学科を設置	
2007	19	新生弓道部創部50周年(昭和32年再建から)	
2009	21	大学理学部に生命科学科を増設	民主党が政権獲得

二、本多流概説

1) 本多流とは

本多利実翁が、日置流竹林派の「斜面打起し射法」に「正面打起しを取り入れ大三をとる射法」とした流派。利実翁の弟子たちが「本多流」と名づける。利実翁の日記には「本多竹林名称致ス」と記されており、竹林派を強く意識している。現在、全日本弓道連盟において基本として指導される事が多いのも正面打起し射法であるが、これも基本的に本多流の流れを汲むもの。正面打起し射法は小笠原流と同じであるが、大三をとると云う点では一線を画する。

射法の特徴として、

- ①身体全体を使って大きく引取り、
- ②押手の下筋を効かせて伸合い、
- ③手の内は中押しにして親指の根元で押切り、
- ④勝手はアーチ型に引込収め、
- ⑤磔の親指を跳ねて弦を外す

「中り・矢早・花形」、「正射・善中・品位」を大事にする射であり、「射は剛健典雅を旨とし精神の修養と肉体の練磨を以て目的とす」とある様に、剛健典雅を目指す射である。

2) 本多利実翁について

本多利實(ほんだ としざね) 1836年(天保7年)～1917年(大正6年) 享年82歳。本多流流祖。号生弓斎。

- 1836年 旗本・竹林派家元本多利重長男として生まれる。(初代利友から13代目)
- 1841年 父に弓を学び始める(6歳)
- 1860年 利重より日置流尾州竹林派皆伝印可を受ける(25歳)
- 1867年 家督を相続する(32歳)
- 1869年 医学校(現東大医学部)勤務
- 1874年 文部省医務局分課種痘所勤務
- 1889年 『弓術保存教授及演説主意』を著し、弓術継続会を設立。神田小川町に「弓術練習所」開設
- 1892年 第一高等学校弓術教授
- 1900年 日本体育会弓術部教授
- 1902年 東京美術学校弓術部教授、帝国大学運動会弓術部師範
- 1903年 華族会館弓術教授
- 1905年 **学習院弓術師範**
- 1907年 千葉師範学校弓術部教授、千葉県専門医学校弓術部教師
- 1908年 『日置流竹林派弓術書』を出版公表する
- 1909年 大日本弓術会、日本銀行弓術部、東京音楽学校弓術部教授
- 1917年 東京帝国大学に家元継承についての覚書などを預託する。東京市電の事故により逝去
没後宗家としての権限は門弟である東京帝国大学弓術部に預託され、「生弓会」が組織される

主な弓術に関する著書

- 『弓道保存教授及演説主意』(1889年) 『弓学講義』(1900年) 『弓道大意』(1902年) 『射法正規』(1907年)
- 『日置流竹林派弓術書』(1908年) 『射学要言』(1908年) 『弓学図解』(1908年) 『尾州竹林派弓術書』(1917年)

3) 系譜における本多流

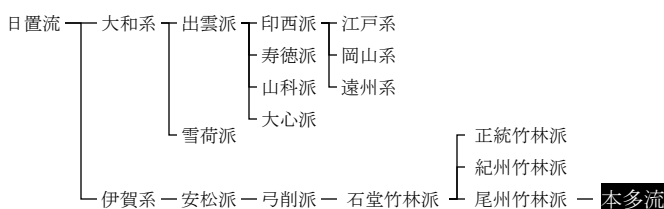
日本の弓術は「歩射」(主に戦場における徒歩による弓射)、「騎射」(馬上から射る弓射)、「堂射」(三十三間堂における通し矢の弓射)に分類する事が出来る。今日的な分類では「礼射」と「武射」に分ける考え方が主流。

礼射: 小笠原流騎射・歩射から儀礼・儀式的なものが加味されつつ発展した射の系統を指す。見た目の美しさと品位を重視する。
武射: 日置流系統の射を指し(歩射・堂射が含まれる)、的中や矢の貫通力に重点をおいた実利的な歩兵用弓術。

「礼の小笠原・射の日置」

弓の引き方を儀礼的に行う事を一般に「礼射」と云うが、小笠原流の称するところのもの。小笠原流の云うところの「礼射」を、日置流系では「体配」と呼び区別している。現在、武射系・礼射系とも「体配」という言葉で統一している。日置流系の体配は、簡略な動作から生まれる武士らしい気合の充実が特徴と云える。

<系統図>



※上記は日置流の主な系統図。現存する流派・他流派がどれだけあるかは不明。

<体配の主な違い>

	武射系	礼射系
矢の持ち方	板付(矢先)を隠して持つ	射付節を持つ
矢番え	矢を二度におくる	矢を一度におくる
乙矢の打込	中指と薬指の間	薬指と小指の間
足踏み	二足で踏み開く	一足で踏み開く
取懸け	矢管の下約10cmの所で、磔の親指の腹を弦に当ててから管まで摺り上げて取懸ける	磔の弦枕を直接弦に絡ませて矢の管を保って取懸ける
足の閉じ方	二足で閉じる	一足で閉じる

三、学習院・弓道部と本多流

「学習院と弓道部の歴史」で見た通り、学習院の弓道は1905(明治33)年に本多利実翁が学習院弓術師範となり、利実翁逝去後は、高弟・大内儀一範士に引き継がれたように、その原点を本多流に求めることができる。

大内範士は、中等科の正科弓道、弓道部師範となり、今上天皇(平成天皇)にも手解きをされた。戦後の弓道部再建以降は、小沼英治範士、亀岡武教士、久田福一範士、伊藤×夫範士、三内暁氏が指導にあたり、いずれも本多流の流れを汲む方々であった。

本多流が目指す「剛健典雅」は指導的立場となる人材の育成に欠くべからざるものであり、その気風を養い、日本の文化を愛し、以て世界に通用する国際人を育てるためにも、学習院弓道部は本多流を継承していくことが望まれる。

【資料について】

以上の資料は、小平稠氏(昭和43卒)が弓道部・師範代となり、新入部員への勉強会のため纏められた資料を元とし、弓道部ホームページに掲載するにあたり、編者(松永・平成16卒)が整理・追加修正したものです。

現役部員に対して、これほどまでに熱心にご指導戴いている小平稠氏に深く感謝申し上げます。編集にあたり極力内容を変えず要点を伝えることを目指しましたが、誤り・不備があればそれは編者個人に帰するものです。

【編集後記】

私は2000年に学習院に入学、弓道部に入部しました。入部当初(4月)は現在の道場を建設中だったため、高等科奥に建てられた仮設道場で弓道を学び始めることになりました。施設面では現在の道場に比べると見劣りする部分が多かったものの、三内暁師範(昭和17卒・現在桜弓会顧問)、小玉博之氏(昭和62卒・現在サブコーチ)、小原将照氏(平成7卒・当時コーチ)、城倉覚主将(平成14卒・現在コーチ)を中心に多くの先輩方にご指導頂けたことは大変貴重な経験でした。弓道を始めて10年、卒業して6年しか経っていませんが、いまでも頼りにするのは現役当時に教えて頂いたことが多く、活かされた範囲は弓道だけに留まりません。

それ故に後輩を指導する立場になった現在、教えて頂いたことはできるだけ後輩に伝えることを心がけているつもりです。私は早気だったため技術面における信用度は低いと自覚していたので、弓道の歴史や弓具について調べた時期があります。現役当時に体系だった書物は弓道教本と数冊の本だけで、読んでも面白くないものばかりでしたが、手ごかりはありました(今では読みやすい解説書・指導本が多く発刊されており、DVD付きの本まであります)。しかし、どうしてもきちんと整理されているものがなかったものがあります。「学習院弓道部の歴史」です。現役当時から、学習院は本多流であること、体配に違いがあることなどは知り得ましたが、断片的でまとまったものはありませんでした。

今年の春から個人的な事情と想いから、弓道部のホームページをリニューアル、運営・管理する機会を得て、多くの弓道部の記録と向きあうことができました。その中でも今回編集した小平稠氏の資料は、教本にない学習院弓道部固有の記録であり、現役・卒業生が共通に情報を共有できたことでも、大変価値があるものだと思います。

弓道部の指導は口頭で、特に技術面が中心であるのは、的中勝負の学生弓道ゆえ致し方なく、他大学でも状況は大差ないと思われます。その為、こうした座学は勉強したい人が勝手にするものと敬遠されがちです。しかし、何気なく、そして当たり前のように利用している道具をはじめ、道場や弓道部という組織を知ること、射技向上だけでなく多方面で役立つものだと思います。現役・卒業生双方の役に立ち、今後の弓道部発展の一助となれば幸いです。

最後に、改めて小平稠氏に厚く御礼申し上げますと共に、HPリニューアルに始まり、本資料掲載の為に内容確認をして頂いた加瀬道也氏(昭和43卒)、櫃岡孝一氏(昭和49卒)、小倉吉晴氏(昭和54卒)、細川勝史氏(平成6卒)のご協力に感謝申し上げます。そして、何より現役部員の活躍、学習院・弓道部のさらなる発展を祈念します。